

## 平城宮北面大垣の調査

—第 648 次

## 1 調査の経過

**調査に至る経緯** 当調査は奈良市佐紀町における個人住宅建設にともなう発掘調査である。特別史跡平城宮跡内にあたり、遺構面および北面大垣の遺存状況の確認を目的として実施した。

**作業の経過** 2022年7月20日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこなった。7月25日から重機掘削を開始し、順次人力掘削に切り替えて遺構検出をおこなった。7月28日に調査区全景写真の撮影をおこない、同日に遺構実測をおこなった。7月29日に追加調査をおこない、同日に遺構面保護のための砂を撒き、埋め戻しと撤収をおこなって発掘作業を終了した。

当調査では出土遺物が少量であったことから、調査と並行して洗浄・分類・註記作業を実施し、主要な遺物を実測図化した。

## 2 遺跡の位置と環境

調査地は、特別史跡平城宮跡の北端、平城宮北面大垣想定位置に該当する。当調査区付近では奈文研が数次にわたる調査を実施している（図81）。約210m東では、北面大垣SA2300やその前身の東西掘立柱塀SA2330の遺構を検出した第23次調査区（『平城報告IX』）が位置する。約104m東の第191-4次調査（『昭和63年平城概報』）ではSA2330を検出している。西隣には第34次調査区（『平城報告IX』）、約17m東には第156-3次調査東区（『昭和59年平城概報』）が位置するが、これらの調査区においては北面大垣に関連する遺構は検出していない。第34次調査区では中近世の東西溝SD4315および近世の土坑SK4326を検出している。さらに約60m西にはSA2330を検出した第164-1次調査区（『昭和60年平城概報』）が位置する。

### 3 調査の方法と成果

**調査の方法** 第34次調査区と一部重複させ、北面大垣想定位置に東西5m、南北6mの30m<sup>2</sup>の調査区を設定した。調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20

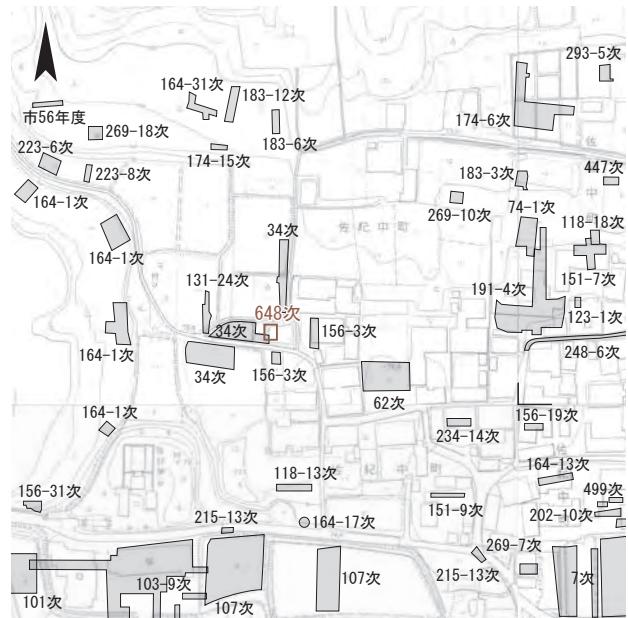


図 81 第 648 次調査区位置図 1:3000

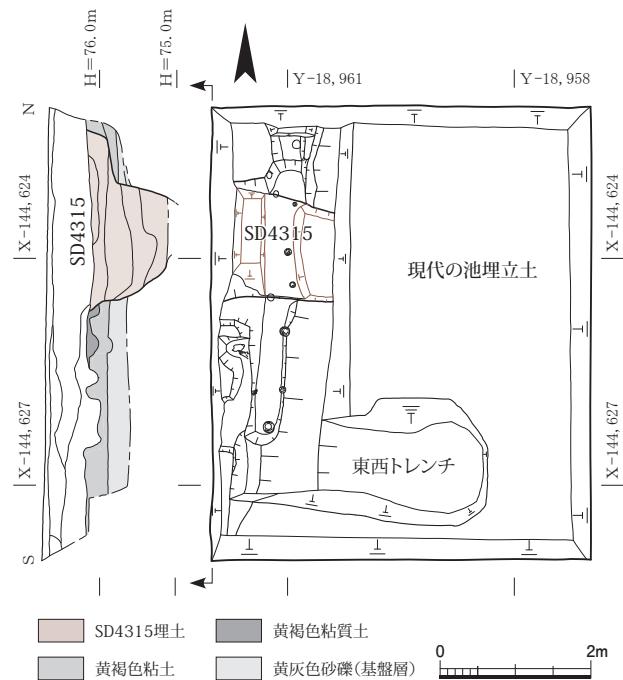


図 82 第 648 次調査区遺構図・西壁土層図 1:100

を基本に平面図を作成した。標高は平城 No.14 (X = -145,153.672, Y = -192,44.829, H = 69.071 m) を基準として第 314-1 次調査 (2000 年度) で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>1)</sup>。調査区の大半は現代の溜池の範囲に位置しており、真砂土で埋め立てられていた。重機掘削によりその真砂土を地表面から約 0.6 m 除去したが、安全確保のため掘削範囲を土層の遺存状態がよい西辺部と北面大垣想定位置に限定した。東西方向のサブトレンチを設定し、重機で真砂土を除去し、遺構の確認をおこなった。調査区西辺部では、重機掘削

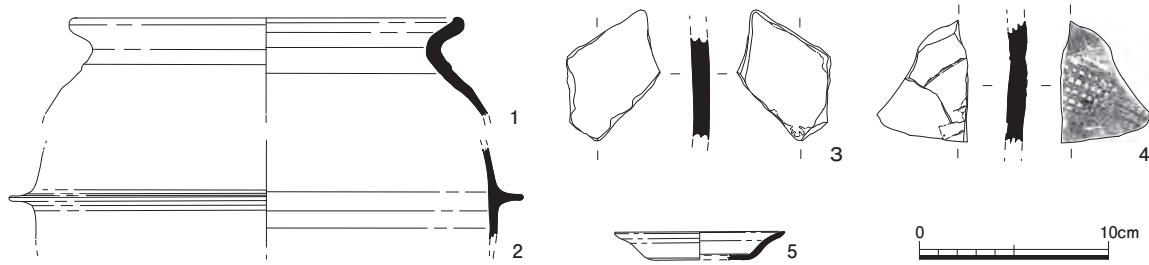


図 83 第 648 次調査東西溝 SD4315 出土土器 1:4

表 14 第 648 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種	点数	型式	種	点数
古代		1		平瓦 (中世)	1
				割駁斗瓦 (近世～近代)	5
軒丸瓦計	丸瓦	1	軒平瓦計	平瓦	0
重量	1.228kg		磚	凝灰岩	6
点数	7				

軒丸瓦	点数	軒平瓦	点数	その他	点数
古代	1			平瓦 (中世)	1
				割駁斗瓦 (近世～近代)	5
軒丸瓦計	丸瓦	1	軒平瓦計	平瓦	0
重量	1.228kg		磚	凝灰岩	6
点数	7				

により表土・近現代造成土を除去した後、人力掘削に切り替え、遺構検出をおこなった。東西溝 SD4315 を検出し、完掘を目指したが、現地表からの深さが約 1.5 m 以上となつたため、安全確保のため掘削を停止した。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

**基本層序** 調査区の大部分は現代の溜池によって削平され、真砂土で埋め立てられていた。その真砂土と池埋土、池底面の基盤層（いわゆる地山、後述の黄灰色砂礫層）以外の堆積土が残っていたのは調査区西辺部だけであった。その層序は、現地表から表土（厚さ約 5 cm）、近現代造成土（約 55 cm）、黄褐色粘質土（約 15 cm）、黄褐色粘土（約 30 cm）、黄灰色砂礫（基盤層）の順である（図 82）。遺構検出は、削平が少ない地点では黄褐色粘土層の上面で、削平が著しい地点ではさらに下層の黄灰色砂礫層の上面でおこなった。検出面の標高は 74.6 ~ 76.2 m である。

**検出遺構** 中近世のものとみられる東西溝 SD4315 を検出した（図 82、PL25-1）が、北面大垣 SA2300 や東西堀 SA2330 は確認できなかった。

**東西溝 SD4315** 調査区西北部で検出した東西方向の素掘溝（PL25-1・2）。溝幅は約 2.4 m、検出面からの深さ 1.1 m 以上。埋土は 5 層に分けられ（最上層から第 1 ~ 5 層と呼称）、上層（第 1 ~ 3 層）と下層（第 4 ~ 5 層）に大別できる。埋土から 16・17 世紀の土器類や中世の瓦類が出土した。第 1 ~ 3 層の深さならびに断面形状は、第 34 次調査で検出した SD4315 とほぼ一致する。一方で、第 34 次調査の SD4315 では第 4・5 層に相当する層は確認できていない。よって、第 1 ~ 3 層は SD4315 の東延長部で、

第 4・5 層は重複する下層遺構の可能性もある。

（山崎有生）

#### 4 出土遺物

**土器・陶磁器類** 表土・包含層・SD4315 等より、古代から近現代までの土器・陶磁器類が整理用コンテナ 1 箱分出土した。SD4315 からは土師器・瓦質土器等が出土した。いずれも小片であるが、遺構の年代の手がかりとなる資料を報告する（図 83）。

1・2 は土師器の土釜の口縁部と胴部<sup>2)</sup>。内外面ともナデ調整。鍔より下方に煤が付着する。胴部中央に鍔がつく大和 I 型<sup>3)</sup>に該当し、16 世紀頃のものとみられる。3 は瓦質土器の破片。器種は不明だが、良好な焼成と焼しを保つ。4 は器種不明の陶器。外面に格子目状のタタキがあり、内面は 3 カ所で段差があり、粘土の継ぎ目の痕跡とみられる。5 は土師器の皿。内外面ともナデ調整。興福寺系土師器皿分類の F 類と特徴が近く、大乗院編年 III - C 期（1560 ~ 1660 年頃）相当のものとみられる<sup>4)</sup>。

以上のように、SD4315 は 16 世紀以降の土器類を含み、遺構の上限年代を示す。

（丹羽崇史）

**瓦類** 出土瓦類は表 14 のとおり。軒丸瓦は残存状況が悪く、古代の瓦としか判定できない。

（今井晃樹）

#### 5 まとめ

中近世の東西溝 1 条を検出した。第 34 次調査で検出した東西溝と一連とみられるが性格は不明である。北面大垣や東西堀の遺構は確認できなかったが、これは現代の溜池等による削平が著しかったためと推測される。（山崎）

#### 註

1) 平城 No.14 は 2013 年に滅失。

2) 1・2 は接合しないが同一個体の可能性がある。

3) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』、1983。

4) 神野恵・尾野善裕「興福寺系土師器皿の編年」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』学報第 97 冊、2018。